

◎展示資料

『尾張名所図会』岡田啓 市 13-55

『尾張名陽図会』高力種信 市 13-60

『鶉衣』横井也有 別 914-1

『建築の肖像 名古屋市市設建築100年誌』

名古屋市建築局 NA52-102

S9137—2382-7

『小酒井不木全集第9巻』改造社 S081-95-9

『江戸川乱歩全集第10巻』平凡社 S9137-2655-10

『江戸川乱歩推理文庫 23 幽鬼の党』講談社 N91868-420-23

『江戸川乱歩アルバム』河出書房新社 N910268-1142

『そうか、もう君はいないのか』

城山三郎 新潮社 9146-6119

『中京財界史』杉浦英一 中部経済新聞社 NA33-8-1

『栄図書館40年史』名古屋市栄図書館 NA01-5

『未青年』春日井建 作品社 S9111-1317

『短歌』第54巻13号(平成19年12月)

鶴舞公園・関西府県聯合共進会 絵葉書

◎参考文献

『乱歩と名古屋』小松史生子 風媒社 910268-1294

『東海の文学散歩』中日新聞本社 NA90-21

『城山三郎展 昭和の旅人』県立神奈川近代文学館

910268-1685

『春日井建の世界』思潮社 9111-476

鶴舞中央図書館 2F 展示

名古屋物語～名古屋ゆかりの文学者とその作品～

2013年6月22日(土)～9月19日(木)

○はじめに

2013年・村上春樹は新作『色彩を持たない田崎つくると、彼の巡礼の年』のなかで、名古屋を重要な地として登場させました。

1684年・松尾芭蕉は名古屋の書林風月堂で、句を詠み自筆の軸を残しました。

芭蕉から春樹までの300年の間、私たちの名古屋は文学の中でどのように描かれてきたのでしょうか。

また、文学者たちにとって、どんな存在だったのでしょうか。

今回の展示では、名古屋にゆかりのある文学者の作品などを紹介します。併せて名古屋市図書館のHPでリストを紹介中の『名古屋物語～小説で読む名古屋』も貸出用として一部を展示いたします。

みなさまの名古屋物語を、ぜひ発見してください。

名古屋市鶴舞中央図書館 発行 2013年6月

○文学者・作品紹介

※松尾芭蕉※ 俳人 1644～1694

「いざ出むゆきみにころぶ所まで」は、貞享元年(1684)名古屋の書林風月堂で詠んだ句です。自筆の軸は、名古屋市博物館が所蔵しています。

また、その様子は「尾張名所図会」「尾張名陽図会」に描かれています。名古屋は、蕉風発祥の地と言われ俳諧において重要な役割を担いました。

※横井也有※ 尾張藩士・国学者 1702～1783

著書「鶉衣」(俳文集)で、風月堂で芭蕉の自筆を見たと書いています。尾張の藩士でも、多才な人物として知られています。

※小酒井不木※ 小説家 明治23年(1890)～昭和4年(1929)

愛知県蟹江町生まれ。旧制愛知県立第一中学校(旭丘高校)卒。

医学者との道を歩みながらも、結核に罹り療養生活を送りました。江戸川乱歩や夢野久作などを世に出したことで知られています。探偵小説『疑問の黒枠』には鶴舞公園をはじめとする名古屋の各所が描かれています。昭和区の鶴舞公園近くに旧居跡があります。

※江戸川乱歩※ 小説家 明治28年(1894)～昭和40年(1965)

三重県名張市生まれ。旧制愛知県立第五中学校(瑞陵高校)卒。

17歳ころまで名古屋で過ごしました。前述の小酒井の後押しによりデビューしたと言われています。『人類史的一飛び』という随筆で鶴舞公園について書いています。『幽鬼の塔』や『猟奇の果』など、名古屋を

舞台にした作品もあります。

※城山三郎※ 小説家 昭和2年(1927)～平成19年(2007)

名古屋市生まれ。名古屋市立名古屋商業学校卒。

『そうか、もう君はいないのか』で昭和25年に名古屋公衆図書館前での容子夫人との初めての出会いを綴っています。城山の処女出版作『中京財界史』(本名・杉浦英一名義)を書くために図書館へ通っている頃でした。公衆図書館は現在の名古屋市西図書館の前身ですが、蔵書は鶴舞中央図書館に受け継がれています。

※春日井建※ 歌人 昭和13年(1938)～平成16年(2004)

愛知県江南市生まれ。名古屋市立向陽高校卒。

1960年『未青年』を刊行。三島由紀夫が序文を寄せ、寺山修司にも絶賛された歌集として知られています。

「方舟より呼びあふ声す

わが名古屋ソドム市にく生めよ殖せよ地に満てよ」(収録歌より)

また、父濱から引き継いで、中部短歌会「短歌」の編集発行人も務めました。

※加藤治郎※ 歌人 昭和34年(1959)～

名古屋市生まれ。

岡井隆(名古屋市生まれ)に師事し、口語短歌の旗手と言われています。現在は、中日新聞夕刊の短歌月評を担当しています。雑誌『短歌』で鶴舞公園の思い出を書いています。

『うたびとの日々』(書肆侃侃房)でも、名古屋と短歌に触れています。